

作物名：きく

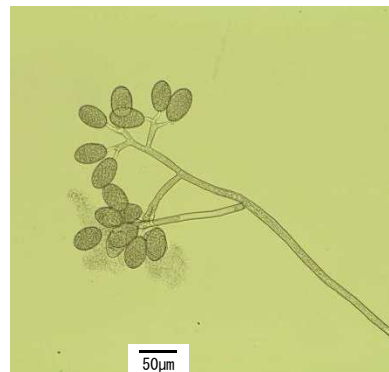
病害虫名：べと病（病原：*Peronospora danica*）



葉表の病徴



葉裏の病斑



べと病菌の分生子及び分生子柄

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉に発生し，特に下葉に多くみられる。
- ・感染葉は，はじめ葉の一部に不整形で境界不明瞭な退緑を生じ，次第に拡大する。その後，葉は黄化から黒褐色に変色し，最後は枯死する。
- ・多湿条件では，葉裏の病斑上に白色～淡黄褐色の粗い粉状のかびを生じ，肉眼でも容易に確認できる。
- ・品種間差が著しく，弱い品種では下葉から枯れ上がることがある。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は，罹病葉上で菌糸又は分生子の形で越冬し，翌年の第一次伝染源になると考えられる。
- ・二次伝染は発病葉の病斑に形成された分生子の飛散によって起こると考えられる。
- ・本病菌は絶対寄生菌（純寄生菌）であり，生きた植物体上でしか生活できない。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は卵菌類に属し，分生子柄（胞子のう柄）及び分生子（胞子のう）を形成する絶対寄生菌である。病葉組織内に卵胞子の形成は確認されていない。
- ・施設，露地ともに発生し，5～6月の生育期に発生しやすい。

4 防除対策

- ・多湿条件は発生を助長するので，ほ場の排水対策や密植を避ける等，風通しを良くする。
- ・登録薬剤（マンネブ水和剤，マンゼブ水和剤）により予防防除を行う。
- ・発病のしやすさには品種間差があるので，発病しにくい品種を利用する。

5 その他

- ・宮城県内では例年ほとんど問題となることはないが，2016年5～6月に一部の地域で発生が目立った。この時，発生がみられたのは特定の品種に限られ，発生品種の隣接ベッドで栽培されていた別品種では全く発生がみられなかった。

6 出典

- （1）参考文献：日本植物病害大辞典（全農教），花き病害図鑑（農研機構花き研究所），坂口ら：九州病虫研報 26:70-72:1980
- （2）写真：宮城県病害虫防除所撮影